

## プロヴァンス地方の装飾祭壇テーブル群 (5-12 世紀)

—再考と問題提起—

奈良澤由美 (プロヴァンス大学)

フランス南東部には、彫刻装飾を施された初期中世の祭壇テーブルが 30 例余り知られている。鳩や羊の行列や葡萄唐草などの植物模様の主題の浮き彫り装飾に特徴付けられるこれらの石造祭壇は、最も古い作例が 5 世紀に遡るが、その類型は 12 世紀まで作られ続けている。こうした制作時期の長さが、この祭壇群の研究において特に興味深い見地を提供するが、とりわけ後期制作グループ(8 世紀から 12 世紀)については、「擬古的」様式を呈する故に、制作年代の推定が極めて難しい例が多く、さらに厳密な議論が必要とされる。

プロヴァンス地方固有のこれらの祭壇群について、近年新しい資料の発見が続いている。2003 年にはカロス (アルプ・マリティーム県) の中世城塞の工事中に新しい祭壇断片が発見された。ロエクス (ヴォークリューズ県) のノートル・ダム・デ・クロット教会横の農場に 1960 年代にその存在のみが指摘されていた祭壇テーブルについては、最近詳しい資料が明らかになった。一方、制作年代に関して特に議論が重ねられてきたカヴァイオン(ヴォークリューズ県)の祭壇については、その起源となる教会での新しい研究調査が 2007-2009 年に進められた。こうした新しい資料をふまえながら、この祭壇グループについて、新たな考察と問題提起が求められる。

初期キリスト教時代 (5-7 世紀) の作例群は、その形体および装飾モチーフについては汎地中海的に普遍的な要素が用いられている。ただしその装飾の配置場所、組み合わせにおいて特色が現れる。マルセイユの大聖堂や聖ヴィクトール修道院に知られる祭壇が最初期のものであり、マルセイユからこのグループが発祥したと推察されるが、単独のアトリエの存在は想定しにくい。この時代の作例は比較的共通した様相を提示する一方、6 世紀制作と推定されるロエクスの祭壇はかなり固有の要素を持つ。ヴェゾン・ラ・ロメヌの大聖堂に保存されるいくつかの祭壇と共通点を示すこの作例は、この古代都市のいずれかの教会からある時代にロエク스에運ばれたと見なすのが妥当であろう。そのことはヴェゾンの大聖堂および聖クナン教会の起源の問題について新しい考察材料を提供する。

少数ではあるが、イタリアのウンブリア地方やフランス南西部に、こうしたプロヴァンス地方の祭壇群と比較可能な例が存在している。これらはそれぞれ地方的な制作であり、7 世紀以降は途絶える。プロヴァンス地方においては 12 世紀まで比較的散発的でありながらも類型祭壇は聖別され続けているが、このことはこの地方の美術的製作活動に顕著である「保守的」性格の現れの一つと言える。カロスで発見された祭壇は 10 世紀ないし 11 世紀初頭頃にその制作年代を推定出来るが、その時代にラングドック地方に流布していた祭壇テーブルと共通する装飾要素を持つことが興味深い。

この装飾祭壇グループを厳密に研究することは、分析が極めて難しいくり型以外の装飾を持たない他の祭壇テーブルの制作年代の推定について、一定の指標を与える一方、いまだ不確かなことの多いプロヴァンス地方の 7 世紀以降 11 世紀以前の彫刻全体について、考察の手がかりのひとつを示す。